

昔話にみる韓・日文化比較

96K005 崔 正 玉

I 序論

1. 研究目的

韓国には「昔話が好きな子は貧乏人になる」という諺があり、日本にも「昼ムガスコ馬鹿語る」や「雪のないときは、ムガスコ語るもんじゃない」などの内容が全国で見られる。このような諺があるにもかかわらず、数多くの昔話・伝説などはお婆さんから孫へ、またその孫から曾孫へと伝えられていた。今とは違ってテレビやゲーム機、本などがなかった時代の昔話は、人々にとって時間潰し以上の目的、例えば先祖の知恵を教えてもらうなどとして利用されたと思われる。このように長い歴史を通して、代々語り継がれている昔話にその社会の社会性や文化の色が入るのは当然のことであろう。日本の昔話研究の創始者である柳田国男も昔話に含まれている文化に注目し、「日本の昔話のなかには日本古代の固有信仰が衰退した形でその姿をとどめている」とのべた。

ある昔話が長い歴史につれ多くの人々に伝えられるとき、その話は時代ごとに、またはその話が伝えられる社会の社会性によって少しずつ変わる。したがって二つの国の類似の話を相互比較することは、昔話によって現在では見ることのない両国の文化の差の根本までも明らかにできると思う。

この論文は韓国と日本の文化比較をするため昔話の「天人女房（きこりと仙女）」を材料とする。この話は韓国の昔話集には欠かせないもので、出てくるのが「木こりと仙女」または「仙女ときこり」である。「仙女ときこり」という名前は韓国式であって、日本では「天人女房」として親しまれている。呼び方は国によってちがうがその基本的な内容はほぼ同じである。

序論ではまず「天人女房（きこりと仙女）」を含む異類婚姻譚の種類や分類などをみることで「天人女房（きこりと仙女）」の昔話での位置を知る。そして、本論からは「天人女房（きこりと仙女）」の内容全体の分析を行い、特徴的な部分を取り出して詳しく相互比較し、その上で韓・日民族の文化の比較をしたい。

2. 異類婚姻譚

昔話は学者によっていろいろな方法で分類されているが、「天人女房（きこりと仙女）」は昔話全体の中でどんな分類に入っているのだろうか。「天人女房」の同類話をみることは、それがもっている性質や特徴を根底から理解することにつながると思う。従って、「天人女房（きこりと仙女）」の内容に入る前に、この話が含まれている異類婚姻話の分類と種類、内容を簡単に見てから韓日の比較をしたい。

(1) 昔話の中の異類婚姻（分類）

①日本の場合

○柳田国男は『日本昔話名彙』で昔話を完形昔話と派生昔話に分けて、完形昔話は10項目に、

派生昔話は6項目に分類した。

柳田による異類婚姻譚の中では、完形昔話の10項目の中で3番目にあたる「幸福なる婚姻」の項目として入っている。そして「幸福なる婚姻」には、「天人女房」をはじめ「絵姿女房」、「鶴女房」、「鴨女房」、「山鳥女房」、「鳥女房」、「狐女房」、「魚女房」、「龍女房」、「蛇女房」、「蛙女房」、「蛇鼈入」、「鬼鼈入」、「河童鼈入」、「猿鼈入」など20型がある。一方、関敬吾は『日本昔話集成』の中で昔話を動物昔話と本格昔話、笑い話に分類し、それぞれをさらに細かく分けた。異類婚姻譚は本格昔話を分けた15項目の中に三つの種類として入っている。三つの種類とは、婚姻・美女と野獣、婚姻・異類女房、婚姻・難問鼈で、天人女房はその中で婚姻・異類女房に入っている。



②韓国の崔仁鶴による分類

崔は昔話を関敬吾と同じく（その内容は異なっているが）動物昔話、本格昔話、笑話に分類した上に神話的昔話を加え、四つに分けている。関敬吾が本格昔話を15項目に分類したのに対し、崔は怪盗退治（地下国の思想）、人と信仰（神仙思想）、死と人生・神と人間（死生観）、そして風水譚、占ト・呪術、孝行譚の六つに分類した。

彼は異類婚姻譚を鼈型と女房型に分け、怪盗退治の6項目即ち、異類鼈、異類女房、婚姻・致福、異常誕生、呪宝、怪盗退治の中に入れた。

(2) 異類婚姻の種類

異類婚姻譚とは動物、精霊、妖怪など、人間以外の者との不思議な婚姻を主題とする昔話群を称するものだが、異類婚姻譚はさらに異類が女の場合は「異類女房譚」、異類が男の場合は「異類鼈譚」と下位分類されている。

①異類女房

○日本：柳田国男が分類した天人女房、絵姿女房、鶴女房（鴨女房、山鳥女房、鳥女房）、狐女房、魚女房、龍女房、蛇女房、蛙女房の他に、蛤女房、猫女房（食わず女房）などがある。

○韓国：仙女女房（木こりと仙女、神仙の娘を妻にするなどを含む）、龍女房（蛇女房）、熊女房、虎女房、狐女房、田螺女房、人魚女房がある。

韓国と日本の女房譚を比べて見たとき、韓国の話で目立つのは虎と熊である。虎と熊は韓国で一番古いとされる「古朝鮮建国神話」にも登場し、韓国の昔話には欠くことのできない存在である。日本の異類女房譚では韓国の「虎女房譚」と内容が似た話もあり、そこでは虎の代わりに猫女房が出てくる。韓国の昔話では虎や熊との関連は韓国昔話の特徴の一つとして考えられる。

一方、日本の特徴としては鶴女房の種類が多いことである。鴨女房や山鳥女房、鳥女房は鶴女房から派生されたとしているが、韓国にはない鶴女房の話がさらにいろいろな種類に分類されている（理由はまだはっきり知らない—鳥は異界とこの世を結ぶ存在）のは、きっと日本での鶴・鳥の存在性が韓国とは異なっているためだと思われる。

②異類聳

○日本：蛇聳入、鬼聳入、河童聳入、猿聳入

○韓国：仙人聳、虎聳入、鯉聳、亀聳、みみず聳、龍聳、蛇聳などがある。

(3) 異類婚姻譚の内容から見る特徴

①異類女房と異類聳

小松和彦は「日本昔話にみる異類婚姻」で異類の性質、また人間との関係を次のように語っている。

「民俗社会の人々は一方においては異類との交流を通じて「福」を獲得しなければならないということを十分に承知していた。共同体を根底から支配する「福」もしくは「力」は外部からやってくるのである。というよりも外部に存在しているのである。（中略）田に水をいれることのできる存在は、異類しかない。けれども、共同体と異類との関係は一方的な関係ではなく、外部から「福」を得た見返りとして共同体から外部へと「福」が流出しなければならないのである。（中略）けれども、共同体はまた出来る限り「福」を外部に流出させないでおこうという志向性をもっている。できれば外部＝異類から「福」をもらっただけにしたいのである。」つまり古くから日本の民間では「福」は外部から来るものだという観念が強く、またその外部からくるものは内部の世界のものとはいろいろな面でちがった力をもっていると考えられたのである。

このような観念は韓国にもあるようで異類婚姻譚にそれがみえる。例えば異類聳譚をみると、異類聳によって生まれた子供は、普通の子供と全然ちがう賢さや力強さを持っているとされている。そして、小松は異類女房での女性と異類聳入における女性の性質は異なると主張している。つまり、異類女房譚での女性は異世（人間の世界＝彼女にして見れば異世）から自分の世界へ帰りたいくないが、かえらざるをえない立場であるが、異類聳譚での女性は出来る限り自分の世界へもどろうとする。彼の言葉で言うと「異類聳では、異類と人間との間で取り交された交換として異類は人間の嫁を手に入れる。それに対して「異類女房」では異類が人間から受けた恩返しとして異類の側から積極的に嫁入りしてくる。」つまり、人間は異類からうけた恩をできれば返さないで済ませたいと思い、異類は恩をかえさねばと思っていると言う。



②韓国と日本

異類婚姻譚をいくつか読んでいたうちに韓国と日本の新たな特徴が目についた。それは異類婚姻譚を異類女房であるか、異類聳であるか分類するまえに、後継者が出てくる話、関敬吾の分類で言うと氏祖誕生型を中心に見ることによってわかる。

異類婚姻譚のなかで氏祖誕生型をみたとき、日本の場合には異類女房の中で、韓国では異類聳に多く出てくる。韓国の場合はそれが極端であって、異類女房例えば仙女から子供が生まれても、その人がどこどこ祖先になったと言った話にはなっていない。ただ木こりの靈魂が鶏や鳥にうつったという鳥類の由来につながるだけである。

一方異類聳譚では異類の聳から得られた子供は結局どこどこ王あるいは、誰々氏の先祖であるという話が大部分をしめている。

例：みみずの子、広積寺のくも、南池の漁龍などがある。

II本論

1. 「天人女房」の基本内容

若者が水浴びをしている天女（仙女）の羽衣を奪って結婚するが、天女（仙女）は羽衣を見つけて天に帰るもの。そして、若者が天女を追って行って再び天上界で生活するが、結局は夫婦になれない話などがある。日本では羽衣伝説として全国で多く伝承されており、現在約130話が報告されている。この論文では羽衣伝説を含めての「天人女房譚」を考えていきたい。

2. 型式分類

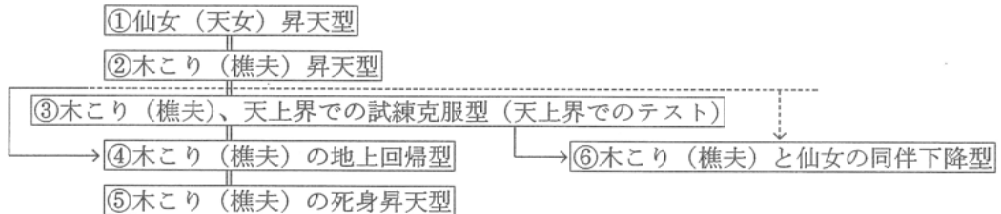
(1) 韓国の「木こりと仙女」分類……申 源龍による分類

① 仙女（天女）昇天型

- a. 木こりの地上生活
 - ・ 貧しい木こりが母と一緒に暮らしている。
 - ・ ある日木こりは獵師をだまし、鹿を助ける。
 - ・ 鹿は恩返しとして仙女と結婚する方法を教える。
- b. 仙女（天女）の下降
 - ・ 天界から降りてきた仙女は沼に入る。
 - ・ 木こりが仙女の羽衣を隠す。
 - ・ 羽衣を盗まれた仙女は天界に昇れず、木こりの嫁になって子供を生む。
- c. 仙女昇天
 - ・ 木こりは鹿に「子供が3人（話によっていろいろ）生まれるまでは羽衣を仙女に返さないように」と言われる。
 - ・ 木こりは鹿の言葉を聞かず羽衣を仙女に渡す。

- ・ 仙女が天界に昇る。
- ②木こり（樵夫）昇天型
 - d. 木こりも昇天
 - ・ 木こりは鹿にもう一度助けてもらい天上界に昇る。
 - ・ 仙女と子供と再会。
- ③木こり（樵夫）、天上界での試練克服型（天上界でのテスト）
 - e. 木こりは天上界でテストを受けさせられる。（話によっては二つか三つぐらい）
 - f. 仙女の助けによってテストに合格し、二人は天上界で一緒に暮らす。
- ④木こり（樵夫）の地上回帰型
 - g. 木こりの地上回帰
 - ・ 木こりは地上（故郷）に帰りたくなる。
 - ・ 仙女にお願いし天馬を出してもらって木こりは母に会える。
 - ・ 仙女は木こりに「天馬から降りないように」と言ったが木こりはそれを守れない。
 - ・ 天馬は天上界に帰ってしまい木こりは地上で死ぬ、あるいは鶏になる。
- ⑤木こり（樵夫）の死身昇天型
 - h. 木こり死身の昇天
 - ・ 仙女は息子に木こり（父親）の死身を天上界にもってこさせて祭るようにする。
- ⑥木こり（樵夫）と仙女の同伴下降型
 - i. 木こり（樵夫）と仙女の同伴下降
 - ・ 二人は仙女の両親から下降することを許してもらって地上で暮らす。

*内容の展開図



(2) 日本の「天人女房」分類方法

「天人女房（きこりと仙女）」の内容を見る際、どこを視点にするかで分類方法は違ってくる。例えば、内容を単純に、主人公の男と仙女が一緒になれるか、なれないかに視点を置いた場合には、結合型と分離型という2分類方法になる。主人公の男と仙女の空間での移動に注目した申源龍は、①仙女（天女）昇天型、②木こり（樵夫）昇天型、③木こり（樵夫）天上界での試練克服型、④木こり（樵夫）の地上回帰型、⑤木こり（樵夫）の死身昇天型、⑥木こり（樵夫）と仙女の同伴下降型という六つの分類をしている。崔仁鶴は話の終わり部分の内容に基づき三つのタイプとした。①仙女の妻と別れる離別型、②後に夫が天に昇って妻子にめぐりあい幸福に暮らすという幸福型、③夫が天に昇ったが難問を授かり失敗して悲運に終わる難題型の3つである。

では、日本での分類はどのようなものがあるか、関敬吾と福田晃の分類を中心にみてみよう。

〈福田晃の分類方法〉

福田晃は君島久子による中国の天人女房分類（天女昇天型、七夕型、難問型、七星始祖型）と韓国の崔 仁鶴の例に準じ天人女房を四つのタイプにまとめた。

①天女昇天型

a. 男の飛衣隠匿

- ・牛飼いがある日、浜辺からの匂いにひかれて行ったら、水浴びをしている天女をみつける。
- ・男は天女の羽衣を持ち家に帰る。

b. 天女と結婚・子供誕生

- ・羽衣を返してもらうために追いかけてきた天女と夫婦になり、子供が生まれる。

c. 羽衣露見

- ・安心した男はある日、羽衣を虫干しして出かける。または子供の暗示によって天女が見つかる。

e. 天女の昇天・離別

- ・天女は羽衣を見ているうちに故郷が恋しくなって天上界に帰ってしまう。

②再会型

f. 父子の昇天

- ・帰ってきた男は天女がいないことに気づき、天女の教えあるいは占師に昇天する方法を聞く。
- ・昇天するには「竹を植えそこに千足のワラジを肥やしになさい」と言われるが、九九九足を作り、天に達するには少し足りなかった。

g. 再会

- ・天女の助け（犬が登場する場合もある）によって夫婦は再会する。

③難問型

g. 舅の難問（いろいろな難問がある）

- ・一問目に天女の父から「種をまいてこい」といわれる。
- ・二問目に瓜の番を任せられる。

h. 難問失敗・七夕由来

- ・男は舅に瓜を食べてはいけないと言われたにも関わらず、熟瓜を口にしてそこから出た水に流される。
- ・結局、天女とは年一回（七月七日）天の川をはさんで会う事になる。

④七星型

a. ～ e. → j. 七つ星由来

〈関敬吾の分類方法〉

関敬吾は『昔話の歴史』で、日本の天人女房は結末の部分が複雑に分化していて、それを根拠に八つの亜型に分かれると述べている。その内容は始祖誕生型、氏神型、離別型、再会型、幸福な婚姻型、養女型、難題求婚型である。福田と異なる部分を中心に見てゆく。

①始祖誕生型

天女が天から降りて水浴びしているところに百姓が通りかかり、羽衣を盗んで夫婦となる。

やがて子供が生まれるが、その子によって天女は羽衣を見つけ昇天する。ここまでは天女昇天型とほぼ同じである。しかし始祖誕生型の場合、地上に残された子供が一族の始祖や帝王となる話に転換する。または喜界島では子供を連れて帰るが、天は昔とすっかり変わり住むところがない。やむなく兄にはトキ、姉にはノロ、妹にはユタの職をさずけて地上に降ろしてやる。これがそれぞれの職業の始めであるという話もある。

②氏神型

関敬吾はこの氏神型を始祖誕生型の変型によるものだと述べている。天女が地上の男と結婚したために身が穢れ、天に昇ることができない。そして大抵は男との間に子供もなく、天女自身が村の守護神として祀られる型である。

③離別型

④再会型

⑤幸福な婚姻型

天女と再び分かれ再会しても年に1回しか会えなくなっている再会型に比べて、幸福な婚姻型は天女が羽衣を手に入れ天に帰った後を男が追ってゆき幸福な婚姻をする型である。

⑥養女型

この型式の最も古いものは『丹後国風土記逸文』で見られる。天女が子供のない老夫婦のもとに養女となって養親に富を与えるが、養親に疎んじられて追放され、もしくは目的を果たして去っていく。

⑦難題求婚型

(3) 型式分類についての分析

韓国の申源龍の分類と日本の関敬吾、福田晃の分類はその国の型式分類ならば問題はないと思うが、両国の「天人女房（きこりと仙女）」を比較分析するにはいくつかの問題が生ずる。まず福田晃の分類に従って韓日の「天人女房（きこりと仙女）」を分類すると、福田の分類に当てはまらない型が発生する。例えば、関敬吾の養女型や始祖誕生型、申源龍の木こりの死身昇天型などである。

この問題は申源龍の分類にみられ、彼の分類には福田の七星型がぬけている。さらに関敬吾は細かく分類しすぎていたため（たとえば天女の子孫によって二つに分類している）内容分類の統一性が喪失した。

そこで私は上記の分類を参考にし、両国の「天人女房（きこりと仙女）」を九つの分類としてまとめた。

- | | |
|-------------|------------|
| ①天女との離別型 | ◎⑤木こり死身昇天型 |
| ②天女との再会型 | ☆⑥養女型 |
| ◎③難問型 a 克服型 | ☆⑦始祖誕生型 |
| 難問型 b 失敗型 | ◎⑧鳥由来型 |
| ④夫婦同伴下降型 | ★⑨七星型 |

◎：韓国独特のもの ☆：日本独特のもの ★：南島（日本）独特のもの

〈参考1〉

①韓国の木こりと仙女

本 の 名 前	年 度	型 式 分 類	背 景	主 人 公 の 職 業	助 け 者 1	い つ	做 込 数	タ ブ ー	仙 女 の 昇 天 形 態	助 け 者 2
1. 口碑大系8-14	1984	天女との離別型	昔ある所	木こり	兎	×	3人	子供が3人出来るまで	木こりが留守の時羽衣を見つけて	×
2. 韓国口傳説話(實海)	1943	天女との離別型	ある山	木こり	ノロ鹿	×	3人	×	酔った木こりから羽衣をもらって	×
3. 温夜夜話「玉女」	1913	天女との再会型	山深い所	木こり少年	鹿	虹から	8人	子供が4人出来るまで	木こりから羽衣を見せられてすぐ	鹿
4. 朝鮮童話集	1921	天女との再会型	江原道金剛山	木こり	仔鹿	午後2時	3人	子供が3人出来るまで	木こりから羽衣を見せられてすぐ	仔鹿
5. 朝鮮の神話と伝説	1943	天女との再会型	江原道金剛山	樵夫(キコリ)	鹿=山神靈/使者	真昼	3人	子供が3人出来るまで	木こりから羽衣を見せられてすぐ	鹿
6. 口碑大系6-8	1982	天女との再会型	黄海道クワル山	木こり	鹿	7月15日	7人	子供が3人出来るまで	木こりが留守の時羽衣を見つけて	鹿
7. 明淑さんのむかしむかし	1985	天女との再会型	江原道金剛山	木こり	鹿	満月	?	子供が3人出来るまで	木こりから羽衣を見せられてすぐ	鹿
◎8. 韓国口伝説話I	1938	離別型-a 克服型	山深い所	金持らの奉公人	鹿	×	3人	子供が4人出来るまで	木こりから羽衣を見せられた夜	鹿
9. 韓国口伝説話II	1926	離別型-b 失敗型	ある山	木こり	ノロ鹿	×	3人	子供が4人出来るまで	木こりが留守の時羽衣を見つけて	ノロ鹿
10. 忠清道民譚	1974	夫婦同伴下降型	ある山	木こり	兎	×	3人	息子が4人出来るまで	木こりが留守の時羽衣を見つけて	兎
11. 口碑大系6-3	1983	夫婦同伴下降型	ある山	木こりの奉公人	虎	×	3人	子供が3人出来るまで	木こりが留守の時羽衣を見つけて	×
12. 口碑大系6-6	1984	夫婦同伴下降型	ある山	木こりの奉公人	鹿	×	3人	×	木こりが留守の時羽衣を見つけて	×
◎13. 口碑大系1-6	1981	木こり死身昇天型	松の森	木こり	鹿と鼠	×	3人	息子が4人出来るまで	木こりが酔っているすき間に	ノロと鼠
◎14. 木こりと仙女の説話研究	1991	木こり死身昇天型	金剛山	木こり	鹿	満月の夜	?人	子供が4人出来るまで	木こりから羽衣を見せられてすぐ	鹿
◎15. 朝鮮民譚集「雄鷄伝説」	1923	鳥由来型	ある所	夫世(ナムクン)	鹿=山神靈	×	?人	子供が4人出来るまで	木こりが酔っているすき間に	ノロ鹿
◎16. 韓国口傳説話(慶南)	1932	鳥由来型	×	木こりの奉公人	ノロ鹿	×	?人	子供が3人出来るまで	木こりから羽衣を見せられてすぐ	ノロ鹿
◎17. 韓国の昔話	1973	鳥由来型	ある山	木こりの奉公人	ノロ鹿	×	3人	子供が3人出来るまで	木こりから羽衣を見せられてすぐ	×
◎18. 口碑大系6-1	1979	鳥由来型	江原道金剛山	フ+氏阿班	鹿	満月の夜	3人	子供が3人出来るまで	木こりから羽衣を見せられてすぐ	鹿
◎19. 口碑大系3-2	1980	鳥由来型	白頭山	木こり	鹿	×	3人	息子が4人出来るまで	木こりから羽衣を見せられてすぐ	鹿
◎20. 口碑大系6-11	1984	鳥由来型	ある山	木こり	ノロ=山の神	×	3人	子供が3人出来るまで	木こりが留守の時羽衣を見つけて	仙女

〈A-1〉→続く

木こりの昇天方法	反 対 者	難問 a	難問 b	助 け る 者 b	問 題 c	結 末
1. x						仙女と木こりは別れる
2. x						仙女と木こりは別れる
3. 釣瓶に乗って	x	x				木こり玉皇上帝の婚養子になる
4. 釣瓶に乗って	x	x				歳をとらず天上界で幸福に暮らす
5. 釣瓶に乗って	x	x				歳をとらず天上界で幸福に暮らす
6. 釣瓶に乗って	x	x				天上界で再会
7. 釣瓶に乗って	x	x				仙女と天上界で暮らす
8. 鹿からもらった馬で	仙女の兄	隠れん坊	物探し(矢,王冠)	木こりが飼っていた鼠	x	兄の死→仙女と再会
9. 釣瓶に乗って	仙女の弟	隠れん坊	物探し(矢)	仙女	故郷を思ふ: 粥	降下馬が死→木こり地上に
10. 釣瓶に乗って	仙女の弟	隠れん坊	物探し(矢)	仙女	故郷を思ふ: 粥	降下馬が死→木こり地上に
11. x	x	x	x	x	x	仙女と地上で暮らす
12. x	仙女の父	隠れん坊	物探し(瓦,3枚)	仙女	x	仙女と地上で暮らす
13. 釣瓶に乗って	仙女の姉2と父	隠れん坊	物探し(玉璽)	猫	故郷を思ふ	犬の尻尾逃がす→木こり死; 死体昇天
14. 釣瓶に乗って	x	x	x	x	母を思ふ; 地上を踏む	馬だけ昇天→木こり(死)→死体昇天
15. 釣瓶に乗って	x	x	x	x	母を思ふ: 粥	馬だけ昇天→木こり(死)雄鶏化
16. 釣瓶に乗って	仙女の父	隠れん坊	x	x	故郷を思ふ; 地上の食	息子が釣瓶の繩を纏す→木こり(死)雄鶏化
17. 仙女の袖を掴んで	仙女の父	隠れん坊	x	x	故郷を思ふ: 粥	馬だけ昇天→木こり(死)鳥化
18. 釣瓶に乗って	繩を切る仙女	x	x	x	x	木こりの昇天失敗(死)→鳥
19. 鹿からもらった馬で	x	x	x	x	母を思ふ: 粥	馬だけ昇天→木こり鳥化
20. 仙女に抱かれて	仙女の父(天の神)	隠れん坊	物探し(王冠)	木こりが飼っていた鼠	母を思ふ: 粥	馬だけ昇天→木こり鳥化

→〈A-2〉 続き

②日本(本土・南島)の天人女房

本の名前	発行年	型式分類	背景	主人公の職業	天女との出会い(助ける者/無)	天女の数	タブー1
☆1. 丹後の国風土記		養女型	丹後国の比治山の真奈半(泉)で天女が水浴	?	和宗は羽衣を隠す→天女を養女に	8人	×
2. 日本昔話通観(青森)	1982	天女との離別型	天上から降りてきた天女が湯で沼に入る	?若者	通りかかった男が着物を隠す→嫁	1人	×
3. 日本昔話通観(福島)	1985	天女との再会型	帰り道で松の木にかけられている羽衣を見つける	漁師	羽衣を持って帰る男を天女が追って来る	1人	×
4. 日本昔話通観(山形)	1986	天女との再会型	三吉と言う人が竹の子を取りに名勝負へ行く	炭焼き	池で天女の羽衣を隠す→嫁	多数	×
5. 昔話の民俗学(埼玉)	1996	天女との再会型	×	漁師	松の枝に掛かっている羽衣を男が拾う→嫁	1人	×
6. 日本昔話通観(宮城)	1982	離間型-b失敗型	権之丞という貧しい人が漁をしている	漁師	無人島で天女発見(羽衣隠す)→嫁	1人	×
7. 日本昔話通観(秋田)	1982	離間型-b失敗型	頭の弱い三郎が魚釣をしている	漁師	羽衣を隠し→天女を嫁にもらう	3人	×
8. 日本昔話通観(岩手)	1985	離間型-b失敗型	羽衣を落として探している天女がいる	?若者	男が羽衣を見つけた隠す→天女を嫁に	1人	×
9. 日本昔話通観(山形)	1986	離間型-b失敗型	牛の世話をしている日笠辺から番りが立つ	牛飼い	羽衣を持って帰る男を天女が追って来る	1人	×
10. 妖怪と美女/神話字(徳島)	1989	離間型-b失敗型	7月の暑い日に符人が川のそばを通る	符人	羽衣を隠し→天女を嫁にもらう	2・3人	×
11. 日本昔話通観(宮城)	1982	夫婦同姓下降型	男が「この世で一番美しい嫁を控かるよう」報告に願う	侍	天から降りてきた天女が行く所が無く嫁に	1人	×
☆12. 日本の民話8(鳥取)	1978	姉妹誕生型	天上から降りてきた天女が湯で水浴びする	百姓	石上の羽衣を通りかかった男が持って帰る→嫁	1人	×
☆13. 日本昔話通観(鹿児島)	1980	姉妹誕生型	天女がチリという川で水浴びをしている	百姓	通りかかった男が着物を奪い→嫁	1人	×
☆14. 日本昔話通観(沖縄)	1983	姉妹誕生型	奥間という人が川(水浴)で天女を発見	百姓	羽衣を隠して嫁にもらう	1人	×
☆15. 日本昔話通観(福島)	1985	姉妹誕生型	仕事中日陰で昼寝をしようとする	百姓	川で天女の羽衣を隠す→嫁	1人	×
☆16. 日本昔話通観(栃木)	1986	姉妹誕生型	天女が池で水浴びをしている	?若者	私の枝に掛かっている羽衣を隠す→嫁	1人	×
★17. 日本昔話通観(鹿児島)	1980	七星型	池辺で翁が犬を飼って住んでいた	犬飼い	ある夜音に誘われ池の岸へ行き羽衣発見→嫁	1人	×
★18. 日本昔話通観(沖縄)	1983	七星型	北斗七星の天女が地上の青年の孝行に感動	?青年	北斗七星の一番姉が嫁にもらうよう青年に願う	1人	×
★19. 日本昔話通観(沖縄)	1983	七星型	若者が毎日天女に向かって悪作の無事を祈る	百姓	祈りが嫁だと勘違いした神は七星の1つを行かせる	1人	天を見るな

(A-1)→続く

(2) 内容分類についての分析

両国の「天人女房（きこりと仙女）」の資料を分析してみると、日本の天人女房には韓国の話と全く同じものもみられるが、韓国のものにはいくつかのパターンがある。以下では紹介した韓国の話20例と、日本の話19例の内容を中心に分析を行った。（北海道の話を除く）

韓国の「木こりと仙女」と日本の「天人女房」の内容の比較

①韓：ほとんどの背景が山である

日：沼や川などの場所が背景に多い

②韓：男主人公の職業がほとんど木こりである

日：多様…（後で詳しくみたい）

③韓：鹿という山神霊の存在が男の主人公を助ける

日：天女自身が男主人公を助ける

④韓：仙女3人とか子供3人など「3」の数字が多くあらわれる

日：1と999の数が多

⑤韓：難題としては隠れん坊やもの探しが多

日：畑仕事に関する難題が多

内容の全体の流れが（両国にとって独特なものを除いて）似ているものを比較し、みていくと、それらの民族が最もなじんでいる、生活の類りにしている自然環境が何であったか①などが表れる。また、両国の民族が何を重視するか、どんな思想に基づいて考えているかなども昔話にはストーリーとともに柔らかい色で伝わっている。

(3) 天人女房譚にみる文化比較

①男主人公の職業分類

韓国の「天人女房」話の分類資料として使われたのは、鄭寅燮著『温突夜話（仙女と木こり）1913採集』を一番古いものとする38話中心に、日本の場合は稲田活二・小沢俊夫編『日本昔話通観（1-28）』の内容を中心に分類した。

a. 韓国

・木こり（奉公人含め）：35話…92.1%

・両班木こり：1話…2.6%

・牛飼い：2話…5.2%

b. 日本…日本昔話通観には内容が多すぎるため、150話以上の中で主人公の職業がはっきりしている内容の120話を分類した。

・漁師：30話…25%

・百姓：28話…23.3%

・木こり：19話…15%

・漁師：13話…10%

・炭焼き長者：9話…7.5%

・犬飼・牛飼：9話…7.5%

・奉公人：4話…3%

・その他：商人（4）、侍（1）、鉄砲撃ち（1）

②職業分類からみる特徴の分析

主人公の職業を分類したところ、その分類パーセンテージを見てもわかるように両国の相違は著しい。韓国の場合、木こりの職業が圧倒的に多いが、日本の場合は少し違う。主人公の職業がいろいろあって、韓国では全く見られなかった漁師が全体の4分の1をしめており、また日本特有の話としては侍や犬飼が出てくる。

なぜ韓国では主人公の職業が木こりに集中して、日本では多様に現れたのか、その理由を社会構造面と住居生活面という二つの面で考えていきたい。

○理由 a：社会構造の差

古代（三国）の韓国は、一部の支配者を除いて多くの人々は農民であり経済生活の中心は農業であった。その傾向は統一新羅（676）に続き、高麗時代（918-1392）には、貴族・中流層（下級官吏）・良人（農民）・賤民という身分制度が確定することで、農民を大切にす政策に繋っていく反面、商人を賤視する傾向が見られ始めた。そして、李氏朝鮮王朝の士農工商賤の階級差別制度により両班と農民以外の身分（職業）、特に商人を更に賤視するようになった。しかもその身分制度は厳しく守られていて身分上昇は難しく、たとえ両班と賤民が結婚し子供が生まれた場合でもその子供は身分上昇できず賤民になる。したがって、近代以前までの韓国の社会構造のなかで農民という職業は一般的・多数であったと思われる。

それに比べ、日本の商人は賤視されていなかった。むしろ地方によって奨励される場合もあった。そして四方が海に囲まれている日本では漁民の活動は魚貝類などの食糧確保の大切な役割を果たしていた（もちろん生活の主流は農民であったが）。

これらの社会背景の上で作られた昔話には、当然韓国の場合には木こり（≒農民）が、日本の場合には多様の職業での主人公が（農民、漁師など）多く出てくるはずであろう。

○理由 b：住居生活の差

韓国と日本は四季があり、両国とも基本的に木造家屋である。しかし、韓国の気候は大陸性で昼夜、夏冬の温度差は激しいため冬場は温突（オンドル）生活をする。温突生活に必ず必要とされるのが薪である。したがって韓国の農民は山に入り薪を拾ったり枯草をかき集める事も生活の一部であった。

一方、日本の気候は湿度が高いため、通風性を考慮した天井が高いタタミ生活で、冬は炭を使う生活をする。日本の天人女房に炭焼き長者が出てくるのはその生活に由来するものだと考えられる。

③男の主人公の昇天方法の比較…空間移動方法からみる両国の世界観

- a. 韓国：ウサギや鹿が夕顔の種を木こりに渡しそれを伝えて天上界へ移動するものもあるが、それは極少数であって、多くの話では天から降りて来る釣瓶によって木こりは昇天する。
- b. 日本：日本における天人女房での特徴は、天女自らの呪術によるものと、天女が渡した種（それは夕顔だったり、瓜や豆の種だったりもするが）と999という数と結びついた肥料による昇天である。…天女自らの呪術によるものは後から述べる。

④霊性動物の比較：鹿と犬

a. 韓・日両国における鹿の存在

鹿と人間の関係は複雑であり、人間にとっての鹿は、三つの側面から見る事ができる。それは鹿の実用性と害獣性、そして霊獣性であるが、ここでは鹿の霊獣性について考えてみたい（『日本民俗大事典』）。鹿が神聖な動物として信じられていたのは韓国の古文書でもみられる

が、その観念は先史時代（日本の縄文後期）の文化からも見られるという。

先史時代に韓川以南の地域にあった三韓には、政治的支配者以外に祭司長である天君がいた。天君は蘇塗と言う神聖地域で農耕儀礼を行っていたと伝えられているが、その「蘇塗」的祭場での儀礼の光景を描いた土器に鹿が見られる。土器に鹿が描かれているのは日本も同じく、銅鐸に一番多く描かれているのがそれである。鹿と猪がともに代表的狩猟獣であったにもかかわらず、弥生時代以降の絵画では鹿が圧倒的に多い。その現象を平林章人は『鹿と鳥の文化史』で次のように解釈している。

「おそらく、それは単に鹿が豊かな食糧の象徴だったからではなく、古代人によって特別視、精神生活のうえで重い位置を占めていたことを示していると考えられる。（中略）要するに、原始的な思考段階にあった人々にとって、絵を描くと言うことは宗教的な営為でもあり、そこに表された鹿は日常身近に見る鹿ではなく、精神生活の表現そのものであったと考えられる。おそらく、人々はその鹿に、あるいはそれを描いた器物に不可見で神秘的な霊力が秘められていることを感じそれを用いた呪的効果の大なることを信じていたのであろう。」

平林の解釈によれば、鹿を霊獣視する観念は両国とも古くからみられたと言うことになる。では、なぜ韓国の昔話には（天人女房を含め）霊獣としての鹿が日本のものより多く見られるのか。その理由として考えられるのは、鹿に対する霊獣視の一般化である。つまり、鹿を霊獣視する古代からの観念に道教や山神信仰が結びつき、韓国民族にとっての鹿は山深い所に仙人たちと生きている神秘的な動物として認識され、それが上・下階級を問わず広がったためだと考えられる。したがって鹿が描かれている韓国の民画（上）には、必ずと言ってもよいほど神仙思想と関わりがあると思われるもの（例えば不老草や松の枯木、山深いところの雲・滝など）と一緒に描かれている。そして民間人の思考が染み込んでいる昔話にも、出てくる鹿は神秘な力を持った山神自身、あるいは呪術的な力を持った山神の使としての存在が多い。

それに比べ日本での鹿は、古代は韓国と同じく霊獣視する観念があったものの、時代とともにその観念は韓国のそれとは異なっていた。もちろん鹿に対する観念が全て韓国あるいは古代のそれと異なっていたとは言いきれない。「鹿塚伝説」や「鹿教湯伝説」、そして鹿島や春日などの神社での、鹿に対して神聖視する観念は続いているが、全体で考えたときその数は韓国に比べ少ない。

韓国の山神信仰などと結びついた鹿は、韓国民族に神聖な力を持った存在として、人間に有益な動物として認識され、多くの口碑伝承の中にえがかれているが、日本ではそれだけではない。鹿による農作の被害は、害獣としての鹿を人々に思わせ、『日本紀』七に、「日本武尊、信濃の山の中で山神の化けた白鹿に苦しめられたが、蒜をもってこれを殺し、道を失うて困む時、白犬に導かれて美濃に出づ」という文が載せられている『南方熊楠選集2(170p)』。ここでの鹿は悪く、犬は良いとされている。

そこで次に、日本と韓国の「天人女房（きこりと仙女）」に出てくる犬について考えてみる。

b. 韓・日両国における犬の存在

犬は人類史上、最も古くから人に密着して生きてきた動物の一つで、世界の各地域から犬に関する神話や説話などがみられる。有名なギリシャ・ローマ神話にも頭が三つ付いた犬が地獄につながる門の門番をしたとされているし、エスキモー人は犬があつた世につながる橋を見張っていたと信じていた。

韓国と犬の関わりは古くからだと知られているものの、はっきりした時代を示す資料をまだ

持っていないが、日本では縄文時代から獵犬・番犬として飼育されていたという。韓・日両国とも、身近な動物としての犬には、けがれと卑賤のイメージが与えられ、犬に関する言葉には蔑視感覚を含むものが多い。その反面、犬のすぐれた聴・嗅覚は、人にわかりにくいことをすみやかに知る能力を思わせ、犬への特別な能力（霊的な面での力や幸福をもたらす力など）を期待させた。それゆえに両国とも犬が起こした奇跡の話や神秘的な力を発揮して人を助ける話などの口承伝承が少なくない。韓国の場合、例えば「ジソコゲの義犬（高麗時代からの伝説）」、「義狗塚（慶尚北道や平安南道の伝説）」、「忠犬」、「犬岩」、「兄弟と犬」などがある。「兄弟と犬」の内容を要約すると、「ある所に金持ちが住んでいたが、年が過ぎるに従いだんだん貧乏になっていた。ついに家の財産としては柿の木とらっぱ一つ、犬一匹しか残らなかった。ある日、主人は山に登り蜂蜜をとってくる。その蜂蜜を犬が食べて蜂蜜のような糞を毎日して主人に富をもたらした」という話である。そして、日本昔話での犬もまた、日本独特な考え方による特別な力を持った存在として登場している。特に白い犬は霊犬とされており、「花咲爺」や「瘤取り爺」の話は広く知られている。ここで山形県の「花咲爺」の伝型例を簡単に紹介しよう。

「爺が川上から流れてきた箱をあけるとクイゴコ（犬の子）が入っているので大切に育てる。犬が教えるとおり庭の木の下の掘ると宝物が出る。隣の爺が犬を借りて真似るが失敗したので殺して埋め、そこに木を植える。木が一晚のうちに大きくなっているの、よい爺はその木を持ち帰り臼を作る。臼をつくると大判小判が出る。隣の爺が真似て臼をつくときたない物が出たので焼いてしまう。よい爺はその灰を持ち帰り、枯木にまくと花が咲き殿様にほうびをもらう。隣の爺も真似て灰をまくが殿様の目に入り殺される。」という話である。

白い犬は多く仏縁ある吉祥のものとしても古くから知られていて、『今昔物語』二六には以下のような内容がある。…『南方熊楠選集2(164p)』

「参河国の郡司、妻二人に養蚕をさせる。（中略）家に飼うた犬がその蚕を食うた。蚕一つすら養いぬ宿世を哀しみ、犬に向かうて泣きおると、この犬鼻ひると、二つの鼻孔より白糸二筋出る。それを引いて見ると陸続として絶えず、四、五千両巻きおわると犬は死んだ。これは仏神が犬に化しわれを助くることと思うて、屋後の柔木の下に埋めた。」

このように犬と関連した口承文学は両国とも数えられないぐらいだが、その内容を分析した崔仁鶴は『口傳説話研究』で犬の奇跡を次のように述べた。その内容を整理すると、

- ・両国の共通内容：黄金（財なるもの）を糞にするか掘って知らせる
- ・両国の特徴内容：韓国＝畑を耕す、人に変身する／日本＝狩猟で収穫を多くもたらす
- ・両国の犬の出現：韓国＝お墓から／日本＝天上界から、神あるいは竜王のプレゼント

である。

これらの内容で私が注目したいのは、韓・日どちらの民族も犬を特別な動物として見ていたが、韓国の場合はそれを地下の世界とのつながりとして見ていた。一方、日本では天（水）とのつながりと考えて信じられていたことである。したがって天上界を背景としている日本の「天人女房」に犬が出てくるのは、まさしく日本民族が歴史とともに抱いていた犬への観念での表現ではないかと思う。そして、犬に対する日本民族のその観念は韓国民族が鹿に抱いている象徴とも似ているように感じられる。

⑤天女と仙女

〈天女の実存性〉

「天人女房（きこりと仙女）」に出てくる女性主人公を韓国では、ほとんど「仙女」だと表現している。それに対して日本の場合は「天人」あるいは「天女」が大部分である。ここからは、主人公に対する呼び方や内容から天女の両国での実態を推定してみたい。

「仙女」を『日本宗教辞典』で調べると、「女性の形をとる神仙、仙人」だと書かれている。では仙人とはどういう存在であろうか。仙人の存在性の発想は古く、紀元前3世紀頃に山東半島を中心に発生した神仙説に道教などの影響が加わって成立したとされている。この考え方によると、仙人には三つの種類があるという。一つはもともと天界に住んでいる神的な存在。二つ目は地上の人間が生前この世でいろいろな徳行を積み重ねて死んだ後、その霊が天上界へ行き仙人になるケースである。三つ目は人間が生きたまま仙人になれるケースであって、人が世俗を離れて山中に住み不老不死の術や神変自在の術などを体得し、天空に飛翔することができる理想的な人（女性）をいう。仙人は始め「僊人」と言われていたが、僊人とは人間が高い所に昇って姿を変えた者と考えられていた。

「天人」は『日本大事典』では仏教語、天上界あるいは極楽に住む女性などと説明されている。この説明通りならば、日本の天人女房に出てくる天女は人間とは別の神的な存在として描かれているはずである。

しかし、実際両国の話のなかで見られる仙女と天女の性質は逆になっている。つまり韓国での「仙」の字には山の人間という意味が入っているにも関わらず、話の中での仙女は天上界の存在としてしか現れていない。また日本の天女の場合には、「天」の接頭語がついていながらもその内容を見ると、天上界的な性格に加えて地上の人間との関わりが深く感じられる。なぜならば日本での天女の話では実際存在していた王族や貴族と関連した伝説、そして天女が残した子孫が地上に残り生活するという話が（韓国には一つも見られない）多くみられるためである。それは特に日本の南島での天人女房（羽衣伝説）で多く見られている。倉塚曄子は『巫女の文化』で、いくつかの古典を参考にし日本での天女の実存性とその正体を巫女だと主張している。

まず、古典『南島古歌』に出てくる与那原の親川を舞台とした2首の古歌

①与那原の親川に天おり乙女 甘ん世の中の近くなたさ

②与那原の親川にあまくだがるちよん あまくだやあらんうみなりおしぢ

を倉塚は次のように解説した。

「甘ん世」は豊年の意、天女が天下ったから豊年も間近だという予祝できな歌である。②の「うみなりおしぢ」とはウナイ（オナリ＝姉妹）のセヂの意である。ここでは、あまくだ、すなわち天女は、実は霊力あるオナリ自身なのだという意味になる。するとここにうたわれた天女は、決して説話上の存在だけではない。

また「昔、隣の間切の富盛村の按司が湧稻国ノロの美貌に心を奪われ、恋慕の情はつるばかりであったが、ノロは貞女の道を守っていたのでどうすることもできなかった。折しも穂祭の三日崇の日にそなえてノロは寒水川に行き、神衣を洗って寒水の辻に干した。そこは富盛村に近く、また白衣であったので按司の目についた。按司がいぶかしんで人を見せにやったところ神衣であった。そこで按司は今日こそ思いをとげるべしとその場へいそぎ、日頃の恋情を打ち上げた。」

この古文を取り上げ、祭にのぞむ神女は聖水で身を清め髪を洗い、白はち巻に白い神衣をつけること（所により神職によって多少異なるが、これが基本的である）や、この上に綾絹の袴をはいたり、鳥の羽、花冠、玉かざりをつけるなどは、人々に天女の降臨を思わせただけではないかと論述している。そしてノロが神衣を干している間、男につけこまれたが、それはノロが神衣を脱いでいて神性を失い、俗の身になっていたためだと説明し、「天人女房」の天女が羽衣を奪われた部分と共通性を見た。

つまり倉塚がここで言っているのは「祭にのぞむ神女の説話的形象化が、稲束に羽衣を隠されて、稲ならぬ人間の子を生む天女の話として人々に伝えられたのではないか」ということであろう。

では、なぜ韓国の天人女房には仙女の現存性がみられなく、天上界の存在・話のなかでの存在として終わってしまうのであろうか。韓国にも昔から日本と同じく巫女は存在しているのに、なぜ韓国の天人女房では仙女の子孫が日本の話のように巫女の祖先話へとつなげられなかったのであろうか。ここからは、韓国の天人女房譚の原型を探ったうえ、仙女の実存性をしらべるため巫人の祖先の話を検討してみたい。

〈韓国の天人女房譚の原型〉

古川のり子氏は『妖怪と美女の神話学』の中で、高句麗の朱蒙神話は日本の天人女房譚とかなり近い内容をもっているといい、その論拠として次の3点を指摘している。

- ①柳花が朱蒙を卵の形で生む。→その女性の本体は鳥であるということ。
- ②柳花が朱蒙に五穀の種子を与える。→日本の天人女房に出ている天女も子供に穀物を与えて地上に広めさせる。
- ③柳花と天王朗が結婚

この三つの点について下のように反証してみたい。まず柳花の父親である河伯は人間であること。もちろん柳花も人間であるのに、彼女が卵を生んだ事実だけで鳥につなげるのは説得力がない。また柳花が卵を生んだのは、逆に彼女と結婚した、天の男である天王朗の影響によるものと考えた方が近いかもしれない。

また『説話文学研究』で李秀子は、韓国の天人女房の原型を済州島巫歌（世経本解）の中から探し出そうとしたが、その論にも少し無理があると私は思う。なぜならば女性主人公世経が五穀の種を地上に持って来て世経神になる部分だけをみると天人女房の原型譚として考えられるかもしれないが、天人女房の基本構造（女＝異形、男＝人間）とは2話ともほど遠い話であるからだ。「世経本解」に出てくる女主人公は全部神である。したがってこの話は神の世界での話であり、天人女房とは最初から本質的にちがう話であろう。

〈済州島巫歌の祖先の話〉

済州島の『初公本解』には、巫人の祖先に関する次のようなものがある。

林正国大監と金鎮国夫人が十五近くになるまで子宝のないのを嘆き、黄金桃丹の地の寺に水陸供養をして、娘一人が生まれる。その娘、紫芝明王姫が五十歳の時、父母がおのおの天下公事と地下公事を勤めに行く事になり、保護のため姫を家の奥深く閉じこめてゆく。黄金山桃丹野津池の寺の小師僧朱子先生が、三千ソソビ（儒学子）と姫を連れてくることを賭けて訪ねてくる。揺鈴で幽閉された姫を開き迎え、施子授けのふりをして、つむじを三回撫でて行く。姫の妊娠のきざしに、下女が慌てて父母を呼び帰した。その結果、姫は父母に仲人もたてず婚したことを責められ追放される。姫は苦難の末に僧を訪ねて行き、

後に三人の男の子を生む。(中略)三人兄弟は父(僧)を訪ねて行って、三明斗(三つの巫具)を作ってもらい、あの世に行っては三「十王」になり、この世に下がっては三明斗(三人の巫祖、福と命を司る神)になる。

韓国の巫歌のなかで一番古いとされる済州島の巫歌のなかでも、巫者の祖先に関する話には日本の話のような天女の姿は見あたらない。なぜ韓国の天人女房には天女の実存性が見られないのであろうか。私はその理由を儒教の影響による男尊女卑と巫女の賤民化などによるものではないかと思う。

〈儒教の影響による女性の社会的存在性の下落〉

韓国で育てられた女性ならば子供の頃お婆さんに「女はいらない、男の子が一番だ」といわれ、悔しい思いをした覚えが一回ぐらいはあるだろう。韓国にはこのお婆さんのように外孫(=婚出した娘の子)よりは親孫(=内孫:息子の子)を、女の子よりは男の子を大切にしている人が多い。この女性の社会的地位を低くみる考え方は儒教的イデオロギーに基づいている。

儒教での女性は一人の成人としての認識より、子供の頃には父に従い(在家従父)・婚姻後には夫に従い(傭家従夫)・夫の死後には子に従う(亡夫従子)不完全な存在としての人間である。この観念は韓国社会の隅々まで影響を与え、済州島巫歌のなかでも表れている。林正国大監と金鎮国夫人が子供を願い、寺の老僧が神に助けを求める場面で次のような部分がある。

「小僧は菩薩経を読み 阿弥菩薩 坊様菩薩 地蔵菩薩 観世音菩薩助けてくだされ 助けてくだされ。いいながら水陸を納めて百斤長棒を出しおき 金白米を計ったら九十九斤かぎりであった。百斤が満ちたら男のお子さまが施されようものを九十九斤かぎりなので、女のお子様を施されます。」

この内容で注目することは、家父長的な朝鮮社会での女性はいろいろな面で抑圧されていて、女性達は「巫俗」というものを通じてそこから来る問題を解決しようとしたが、その巫女とそれを支える信仰さえも知らないうちに儒教に影響され、女性自身を不完全視していることである。では、韓国には完全な存在としての女性像はないのか。韓国人が描いている仙女像はいったいどこから来ているのか。次はそれを探りもとめたい。

〈韓国の仙女と聖母〉

日本民族での巫女を「天人女房」に出てくる天女が投影されたとするならば、韓国民族は「仙女」と言う存在をどこから、どの存在から求めていたのであろうか。その根拠を探るために韓国の女性神を検討したいが、仙女が登場する背景のほとんどが山であるため、山と関連が深い女性神を中心にみていきたい。

韓国の山神像には一般的に長くて白い髭のお爺さんが虎と一緒にかけられているが、全ての韓国の山神がこの絵のような像に当てはまるとは言えない。数は少ないが韓国の一部の山には女性の山神(=聖母)が存在していて、それには例えば智異山聖母や仙桃山聖母、そして雲梯山聖母などがある。この聖母信仰はどこから発したのであろうか。

智異山聖母像の起源にはいろいろな説があるが、①釈迦の母親である摩耶夫人だという説、②高麗太祖の王后である説、③中国の女神である麻姑信仰が東の方に移動し伝来したと言う説などがある。そして、仙桃山聖母は本来中国の帝室の娘でサソと言う名前の人であるが、神仙術を学び新羅にとどまって、神秘の力を発揮していたため信仰されたという(朴赫居世を生んだとされている)。最後に雲梯山聖母は新羅の二代王である南海王の夫人だという説が確実視されている。いずれも聖母像の起源説には王朝とのかかわりが濃くみられ、王朝血統を神聖視

するために王朝によってつくられたことも考えられる。

では聖母と仙女はどういう関わりがあるのだろうか。李能和の『朝鮮巫俗考』には「智異山で法祐和尚という人が修行をしていたが、ある日山の方面に霧が立ちこめるのを見る。不思議に思いながら、見えない道をなんとか歩き頂上につくと、そこに背が高く力強そうな女がいて、自分は聖母天王だが人間界に降りてきたと言った」という記録がある。

以上の内容をまとめると聖母は古文献に仙女の形として現れるが、その正体は中国の神仙思想と関わりがあったり、王朝との血縁関係があったりしている。したがって韓国民族がみていた昔話での仙女の像には王后などの存在の投影も考えられるのであろう。

Ⅲ 結論（まとめ）

韓・日の口承文芸に神的存在として登場するほとんどは男性の異界人であるが、「天人女房（きこりと仙女）」は女性が神的存在として表現されている少ない例話の一つである。「女性が神的存在として出てくる話」は少ないながら、そこには長い歴史を通して続けられてきた男性中心社会での女性、社会の正面には出てこない存在としての女性の顔以外の側面が見られる。

これまで「天人女房（きこりと仙女）」のさまざまなパターンを分析し、天女の実存性について両国に分けて考察してきたが、日本本土と韓国の話からはカミのような存在として人々に信じられてきた天女（仙女）の属性がみられる。それは支配階級によって自分たちの支配を正当化するために作られた文化の一つかもしれない。

両方とも、話の中で天女がカミ的な存在として伝承されていてもその形には差がある。日本本土の話が穀物の神として想像されたとするならば、韓国の話は山神である聖母として人々に印象されたと思われる。類話でありながら最も基本にある人間の信仰的な部分で異なる形であられるのはなぜか。その原因はいろいろ考えられるが、それらの民族が処している自然環境と、それによる生活文化の差から生じたのではないかと思われる。つまり同じ稲作文化圏であっても、気候が韓国に較べ暖かい日本本土の場合は、水稲耕作を背景とした信仰文化が早くから社会に定着した。そしてその中で天人女房の話が地域によっては穀物の神としての女神の存在が信じられるため、そうしたものと結合が考えられる。韓国は農耕民の守護神として信仰されてきた山岳信仰の文化が神仙思想と結びついて、天人女房（木こりと仙女）として伝承されてきたのではないかと考えられる。

そして、天女の実存性が南西諸島では前者二つとはまたちがう新たな形（巫女性）で語られている。その理由としては、南島に古くからあったオナリ神信仰文化が指摘できる。要するに南島には女性を神聖視する観念が古代からあるが、その上に後から入ってきた天人女房の話が重なり、天女あるいは彼女が残した子孫に「神女の先祖」だという想像をもたらして、人々に語り継がれていていったのではないだろうか。

では、聖母と仙女はどういう関わりがあるのだろうか。前述の李能和の『朝鮮巫俗考』には「智異山で法祐和尚が修道中に聖母天王に出会った」という記録がある。

この記録のように聖母は古文献に仙女の形として現れたりするが、その正体は中国の神仙思想と関わりがあったり、王朝との血縁関係があったりしている。したがって韓国民族がみていた昔話での仙女の像には王后などの存在の投影も考えられるのであろう。

〔中国大陸における天人女房譚(口承)伝承分布図〕

(君島久子氏作成「東洋の天女たち」による)



- 先島諸島
 - 池田島
 - 伊良部島
 - 宮古島
 - 水納島
 - 名原島
 - 宮古列島
- 八重山列島
 - 石垣島
 - 読里島
 - 日本島

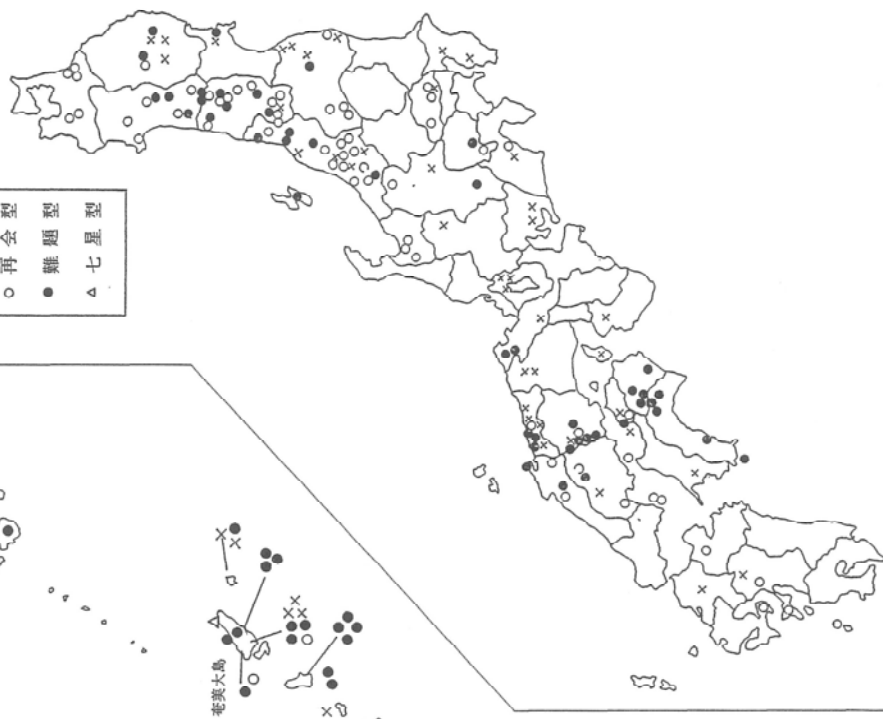
〔琉球諸島における天人女房譚(口承)伝承分布図〕



各図凡例

- × 天女昇天型
- 再会型
- 難題型
- △ 七星型

〔日本本土における天人女房譚(口承)伝承分布図〕



参考文献

(1) 韓国篇

- 申 源龍著『木こりと仙女の説話研究』集文堂、1993年。
孫 晋泰著『朝鮮民譚集（鶏雄傳説）』郷土文化社、1927年。
中村亮平編『朝鮮童話集奥附』富山房、1921年。
崔 仁鶴著『朝鮮伝説集』三秀社、1977年。
崔 仁鶴著『韓国の昔話』三弥井書店、1980年。
崔 仁鶴著『韓国昔話の研究』弘文堂、1976年。
崔 仁鶴著『口傳説話研究』セムン社、1994年、(ハングル版)。
鄭 寅燮著『温突夜話（仙女と木こり）』三弥井書店、1983年：1927年の再版本。
申 来鉉著『朝鮮の神話と傳説（羽衣）』太平出版社、1971年：東京一杉書店1943年の再版本。
成 耆説著『韓国口碑傳承の研究』一潮閣、1976年。
野村敬子編『明淑のむかしむかし』かのう書房、1995年。
任 哲宰著『韓国口傳説話（慶尚南道篇）』平民社、1993年（ハングル）。
任 哲宰著『韓国口傳説話（全羅北道篇）』平民社、(ハングル)。
任 哲宰著『韓国口傳説話（黄海道篇）』平民社、(ハングル)。
韓国精神文化研究院『韓国口碑文学大系（全82冊）』の中13冊（ハングル）。
1-3 京畿道篇 1980年。
1-4 京畿道篇 1981年。
1-6 京畿道篇 1982年。
1-7 京畿道篇 1982年。
3-1 忠清北道篇 1982年。
3-2 忠清北道篇 1981年。
4-2 忠清南道篇 1980年。
4-3 忠清南道篇 1982年。
4-4 忠清南道篇 1983年。
5-1 全羅北道篇 1980年。
5-2 全羅北道篇 1980年。
7-1 慶尚北道篇 1980年。
8-6 慶尚南道篇 1981年。
朴 榮濬著『韓国の民話ト伝説（古代編）』韓国文化図書出版社、1975年。
朝鮮総督府著作『普國五』朝鮮書籍、1923年。
華鏡古典文學研究会編『説話文學研究（上）』壇国大学出版社、1998年。
韓国精神文化研究院編『韓国民族文化大百科辞典』韓国民族文化大百科辞典出版部、1993年。
李 能和『朝鮮巫俗考』白鹿出版社、1983年。

(2) 日本篇

- 関 敬吾編『日本昔話集成』全6巻、角川書店、1950～58年。
関 敬吾著『日本昔話の比較研究』同朋舎、1980年。
関 敬吾著『昔話の歴史』同朋舎、1982年。
柳田国男著『柳田国男集26』筑摩書房、1989年。
柳田国男著『柳田国男集6』筑摩書房、1988年。
稲田活二・小沢俊夫編『日本昔話通観（1-28）』同朋舎、1978～1988。
稲田活二著『昔話の源流』三弥井書店、1997年。
吉田敦彦著『妖怪と美女の神話学』名著刊行会、1989年。
荒木博之・野村純一・福田晃編『日本伝説大系』みずうみ書房、1989年。

巖谷小波編『「説話」大百科辞典』名著普及会、1984年。
藤村 作編『日本文学辞典』新潮社、1967年。
福田 晃著『神語り・昔語りの伝承世界』第一書房、1997年。
武田 正編『日本の民話3東北(二)』ぎょうせい、1979年。
川上迥彦・三原幸久編『日本の民話8山陰』ぎょうせい、1978年。
有馬英子・遠藤庄治編『日本民話12九州(二)・沖縄』ぎょうせい、1979年。
峰山町企画商工課編『丹後みねやま羽衣伝説』京都府峰山町、1998年。
志田義秀著『日本の傳説と童話』大東出版社、1941年。
日本語・日本文化研究会編『シリーズ「日本を考える」1言葉と文化』にほんごの凡人社、1986年。
小松和彦『日本昔話にみる異類婚姻』。
臼田甚五郎著『口承文學大概』おうふう、1997年。
東北大学文学部日本文化研究所編『神觀念の比較文化論的研究』講談社、1981年。
堀内秀晃・秋山 虔(校注者)『竹取物語 伊勢物語』岩波書房、1997年。
倉塚暉子著『巫女の文化』平凡社、1987年。
志田義秀著『日本の傳説と童話』大東出版社、1941年。
福田 晃・岩瀬 博編『民話の原風景』世界思想社、1996年。
張 籌根著『韓国の民間信仰(資料編)』三秀舎、1994年。
小澤俊夫編『昔話入門』ぎょうせい、1998年。
依田千百子著『朝鮮民族文化の研究』琉球書房、1985年。
依田千百子著『朝鮮神話伝承の研究』琉球書房、1991年。
南方熊楠著『南方熊楠選集 第二卷』平凡社、1948年。
平林章人『鹿と鳥の文化史』白水社、1992年。
福田アジオ、神田より子他編『日本民俗大事典』吉川弘文館、1999年。
大塚民俗学会編『日本民俗辞典』弘文堂、1994年。
稲田活二・大島建彦・川端豊彦・福田 晃・三原幸久編『日本昔話辞典』弘文堂、1994年。
宮田 登・大島暁雄・佐藤良博・宮内正勝・松崎憲三著『民俗探訪辞典』山川出版、1994年。
金 両基著『日本の文化韓国の習俗』明石書店、1999年。
日本放送協会編『日本昔話名彙』日本放送出版協会、1948年。
伊藤亜人他編『朝鮮を知る事典』平凡社、1996年。

(卒論指導教員 神田より子)